

# The Effectiveness of Spoken and Written Retelling Activity on Productive Vocabulary Knowledge

## 発信語彙知識に対する話し言葉と書き言葉による再話活動の効果

教科教育・特別支援教育プログラム 言語・文化・社会グループ  
佐藤 扶

### 1. はじめに

2022年度より実施された学習指導要領(文部科学省, 2018)では、高等学校までで4000~5000語程度の語彙指導が求められており、指導すべき語彙が大幅に増加した。また、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙を「受容語彙」、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙を「発信語彙」と区別し、学習を繰り返し行い、何度も語彙に触れることで、徐々に受容から発信への転換が促進されるよう指導する必要性が強調されている。繰り返し(repetition)は語彙学習において重要である(Webb & Nation, 2017)が、どのような語彙学習活動が有効であるか、日本における教室内指導において検証していく余地が残っている

Output taskによって発信語彙が学習されることを示す先行研究はあるが(Amagai, 2018 a, b)、活動(spoken)とテスト(written)形式が一致していないことが課題として挙げられる(Uchihara, 2019)。また、音声形式で発信語彙を測定している研究は少ない(Uchihara & Clenton, 2022)。

語彙学習活動を比較する枠組みとして Involvement load hypothesis(ILH : Laufer & Hulstijn, 2001)がある。ILHは三つの構成概念(Need, Search, Evaluation)で構成されている。語彙学習活動を比較し、点数が高ければ高いほど、活動は効果的である。ILHを支持する結果もあるが(Keating, 2008)、反する結果もある(Bao, 2015; Kim, 2008)。また、モードが筆記におけるILHの検証が多く(Hulstijn & Laufer, 2001; Kim, 2008; Keating, 2008)、speakingで検証した研究は数少ない(Hazard, 2015, speaking activity; Karalik & Merç, 2016, retelling activity)。Yanagisawa & Webb (2021)による

メタ分析では、Searchは変数としてILHの予測に寄与せず、モードなどの他の予測変数を考慮することが示唆されていた。ILH研究におけるspeaking研究は数が少ないため、慎重に検討する必要がある。

本研究で比較・検討するのはspoken retellingとwritten retellingである。Retellingは「ストーリーを読んだ後に、原稿を見ない状態で、そのストーリーの内容を知らない人に語る活動」と定義される(卯城, 2009)。日本の英語教育ではリーディング研究において盛んに検証が行なわれており(Kai, 2008; 2011)、読み手の理解を深める(Kai, 2011)ことが示されている。近年ではアウトプット活動として、4技能統合の授業に繋がることが期待されている(佐々木, 2020)。語彙学習活動としてretellingが受容語彙の獲得に有効である(Nguyen, C. D., & Boers, F., 2019; Joe, 1998)が、ILHの枠組みで発信語彙に関して効果性を検証した研究はない。

Karalik & Merç, (2016)ではretellingのILHをNeed = +, Search = -, Evaluation = ++と定義している。これは活動のモードがspokenであってもwrittenであっても活動の関与負荷は変わらず、活動による語彙の獲得は同程度とみなされている。しかし、Yanagisawa & Webb (2022)が作成した、付随的語彙学習活動の効果を予測する公式(Incidental Vocabulary Learning formula; IVL formula)では、学習実施直後の効果性指標はwritten (61.9) > spoken (52.1)、学習後の保持ではwritten = spoken (43.9)となっている。すなわち、ILHとIVL formulaでは結果の予測が異なっている。本研究では、ILHとIVL formula、二つの枠組みからretellingのモードの違いがどのように発信語彙の習得と獲得に影響を与えたか調査した。

## 2. リサーチクエストと研究手法

### (1) リサーチクエスト

- ・アウトプットのモードの違いは発信語彙の獲得と保持にどの程度に影響を与えるのか？
- ・学習者はどの程度、目標語彙を retelling 活動において使用しているのか？

(2) 協力者：日本人高校生 56 名、2 クラスを Spoken retelling group と written retelling group に割り当てた。

### (3) マテリアル

目標語：Crossroads English Communication II Unit7 part1 における新出語 20 語

テスト：form recall test を音声・筆記で実施。

### (4) 分析

2 要因 (Spoken Group or Written Group) 3 水準 (事前・事後・遅延) による、反復測定分散分析を実施した。

## 3. 実験結果

音声形式の recall test において、グループ (Spoken、Written) と時間 (事前、事後、遅延) の交互作用は見られず ( $F(1,60) = 0.05, p = .95, \eta^2 = .00$ )、時間の主効果は有意であった ( $F(1,60) = 86.59, p < .001, \eta^2 = .17$ )。一方で、グループの主効果は有意ではなかった ( $F(1,60) = 0.429, p = .92, \eta^2 = .00$ )。

Spoken グループでは、時間の主効果が有意であり ( $F(2, 70) = 82.68, p < .001, \eta^2 = .70$ )、事前と事後、事前と遅延の間に有意な差があった (それぞれ、 $d = 1.05, p < .001; d = 0.76, p < .001$ )。一方で、事後と遅延の間には有意な差がなかった ( $d = 0.29, p = .003$ )。Written グループでも同様に、時間の主効果が有意 ( $F(2, 38) = 40.62, p < .001, \eta^2 = .68$ ) であり、事前と事後、事前と遅延の間に有意な差があったが (それぞれ、 $d = 1.26, p < .001; d = 0.96, p < .001$ 、事後と遅延の間には有意な差がなかった ( $d = 0.30, p = .045$ ))。

筆記形式の recall test においても、グループと時間の交互作用は見られず ( $F(1,60) = 1.51, p = .23, \eta^2 = .004$ )、時間の主効果が有意であった ( $F(1,60) = 85.272, p < .001, \eta^2 = .19$ )。ただし、グループの主効果は有意ではなかった ( $F(1,60) = 1.43, p = .24, \eta^2 = .02$ )。

Spoken グループでは、時間の主効果が有意であり ( $F(2, 70) = 25.38, p < .001, \eta^2 = .43$ )、事前と事後、事前と遅延の間に有意な差があった (それぞれ、 $d = 1.07, p < .001; d = 0.72, p < .001$ )。一方で、事後と遅延の間には

有意な差がなかった ( $d = 0.35, p = .074$ )。Written グループでも同様に、時間の主効果が有意 ( $F(2, 38) = 32.84, p < .001, \eta^2 = .63$ ) であり、事前と事後、事前と遅延の間に有意な差があったが (それぞれ、 $d = 1.28, p < .001; d = 0.96, p < .001$ 、事後と遅延の間には有意な差がなかった ( $d = 0.32, p = .177$ ))。

表 1 Retelling 活動における記述統計

	Spoken	Written
語数の平均	103.42 語 ( $SD = 45.13$ )	179.95 語 ( $SD = 62.72$ )
タスクの平均時間	2.03 minutes ( $SD = 0.69$ )	29.8 minutes ( $SD = 6.19$ )
目標語彙の使用割合	41.5 %	64.6 %

Retelling 活動において、Spoken グループ ( $M = 103.42, SD = 45.13$ ) と Written グループ ( $M = 179.95, SD = 62.72$ ) の単語数の差を検討するために t 検定を実施した。その結果、両グループ間に有意な差があった ( $t(48) = 4.98, p < .001$ )。つまり Written グループが Spoken グループを上回っていることを示唆され、強い効果があることが示された ( $d = 1.40$ )。また、目標語彙の使用割合も Written グループが Spoken グループを上回っており、より多くの語彙が再生されたことが示されている (表 1)。しかし、Written retelling を実施する際には spoken retelling の約 15 倍の時間を必要であった。

## 4. 結論

分析結果より、音声・筆記テストであってもグループ間における活動のモードでは差が無いが、事後・遅延テストによって発信語彙知識が獲得・保持されていたことが示唆された。つまり、IVL formula において語彙の保持における公式と一致していた。また、ILH を支持していた。Retelling 活動における語数と目標語彙数の割合は written グループが spoken グループを上回っているものの、spoken retelling が written retelling より時間効率がよいことが示唆された。すなわち、spoken retelling 活動を繰り返し行なうことで、効果がより高まることが考えられる。Retelling 活動はどのモードであっても、発信語彙知識が獲得・保持に繋がるため、両方のモードを活動として教室内指導で取り入れることが理想である。